
ウルトラマンホウオウ

黄金 白銀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ウルトラマンホウオウ

【Nコード】

N0776T

【作者名】

黄金 白銀

【あらすじ】

これは『リトラ〜守りたいもの〜』の続編です…

あの『怪獣災害』から14年が経ち、新たなる怪獣が次々と出現。戦う地球防衛チーム『BIRD』。その時、愛川スザクが『炎』に包まれ『巨人』となった。その名は『ウルトラマンホウオウ』！

《《火の鳥は命の象徴！》》

第1話『火の鳥』

あの『怪獣災害』から十四年という歳月が流れた…

その十四年間に多くの怪獣、そして宇宙からの侵略者が現れてきた…

人類はその驚異に立ち向かうべく、地球防衛組織『WDS』（ワールド・ディフェンス・ソルジャーズの略）を設立する…

その『WDS』日本支部には特殊防衛怪獣撃墜事件調査チーム『BIRD』がある…

これから始まる物語はBIRDと…

光を司る、不死身の巨人が人類の平和のために戦う物語なのです…

ボオオオオオオオオオオ…

和歌山県 白浜

多くの船が漂う港。時間帯は夜、今、ここに危機が訪れる。

ザパアアアアアアン！！

キシヤアアアアアア！！

白浜の近海に巨大な異形の海蛇が現れる。

「何だありゃ！」

「怪獣だ！逃げろー！」

港の漁師達は海蛇を見て、そのおぞましい姿に恐怖して逃げ出す。

キシヤアアアアア！！

【海蛇怪獣シネーク】

ポオオオオオオオ！！

シネークは口から水色に光る光線を吐く。

ドガアアアアアン！！

光線は港を破壊する。逃げ惑う人々、怪獣シネークを恐怖しているのだ。

キシヤアアアアアア！！

高らかに鳴くシネーク。

コオオオオオオオオ！！

港に飛んで来る飛行機、それは三機ある。それぞれに『1』『2』『3』と書かれている。

「こちら『ファルコン』、怪獣を肉眼で確認！」

『ファルコン』は『1』、戦闘機に近く、機首に搭載された一つのレーザー砲を装備している、三機の中で軽そうに見えるスピードタイプ、一人乗り。

「こちら『イーグル』、怪獣を攻撃しますか？」

『イーグル』は『2』、『ファルコン』よりも装備が多い、ミサイルや破壊光線砲をも搭載された火力タイプ、二人乗り。

「こちら『ピジョン』、『ファルコン』『イーグル』両機、怪獣に攻撃してください。」

『ピジョン』は『3』、『ファルコン』『イーグル』と違い、武器はあまり備えておらず、怪獣の分析、データ回収を目的とした調査タイプ、最大四人は乗れる。

この三機はBIRDの戦闘機、『ジェットバード』である。

「行くぞ！」

イーグルの中からの声と同時に三機のうちの二機、ファルコンとイーグルが怪獣に立ち向かう。

キシヤアアアアアア！

シネークはファルコンとイーグルに向けて鳴き、

ポオオオオオオオオ!!

光線を吐く。

「あまい！」

ファルコンとイーグルは軽やかによける。

「こつちの番だ！」

ピッ!

ビイイイイ!!

ファルコンのレーザー砲がうなる。レーザーはシネークの頭に直撃する。シネークは痛がる。

「まだまだあ!!」

ポウンッ! ポウンッ!

イーグルからミサイルが発射される。

ボカン! ボカン!

イーグルのミサイルはシネークに直撃する。シネークは苦しむ。

「分析終わりました。」

ビジョンからの通信だ。

「ファルコン、イーグル、あの怪獣の首元辺りにあるヒレを攻撃してください、そこにエラがあります、それが弱点です。」

その報告を聞いたファルコンとイーグルはシネークのエラをレーザ
ー、ミサイルで集中攻撃をする。

キシヤアアアアアア！

シネークは痛みがり、苦しむ。

キ…シヤ…アア…アア…

だんだんと鳴き声が小さくなっていく。

…シヤア…ア…… ザパアアアアン！！

シネークはその場で体力がつかけて倒れた。

「生命反応無し、死亡を確認。みなさん、おつかれさま！」

ピジョンからの通信に両機に乗っているパイロットはフウツと息を
つく。

「本部から通信です、すぐに帰還せよと。」

「あれ、怪獣の処理は？」

「自衛隊にまかせるんだって。」

「そうか、じゃあ、帰還しますか！」

三機はすぐさま帰還する。

ここはWDS日本支部BIRDの基地『ビッグロック』。ビッグロックはピラミッドのような三角形となっている基地だ。今ここでは作戦会議が開かれていた。

「はい！みなさん注目！」

基地内にあるBIRDの司令室でボードの前に立っているのは『雉野タツミ』隊員。BIRDのメカニック及び怪獣、宇宙人のデータ分析を担当するメガネをかけた女性隊員、ピジョンに乗って、怪獣の分析を行っていた隊員。

「この海域に現れた怪獣『海蛇怪獣シネーク』は、海蛇が何かの変動によつて怪獣化したものと思われれます。」

タツミは怪獣について説明をする。

「海蛇かあ、俺はてつきりウツボが怪獣化したものと思ったよ。」

今しゃべったのは『木月トラオ』隊員。BIRDの隊員達の中でパイロットの腕前を持つ。イーグルで操縦担当。

「へ？オイラはウナギかと思った。」

次にしゃべったのは『袋田ゲンブ』隊員。BIRDの隊員達の中で一の怪力の持ち主。ピジョンで操縦を担当していた。

「私は魚が海蛇のようになったものだと思ったわ。」

次にしゃべったのは『白鳥シズク』副隊長。射撃の名手、みんなのお姉さんの存在。イーグルで射撃担当をしていた。

「うーん、どれが良いかな？」

撮った写真を整理しているのは『星野スズメ』隊員。怪獣災害、宇宙人事件などを載せている雑誌『週間BIRD』のカメラマン。怪獣事件が起きた現場ではスクープを撮ろうとマスコミがやって来る、

その時に大勢のマスコミが大ケガをする、そういった事が起きないように、しっかりと事件の内容を世間に知らせるために、WDSは怪獣事件専門の雑誌を作り、専門のカメラマンも隊員にし、報道を行っている。さっきの怪獣退治にはピジョンに乗って、写真を撮っていた。

「これが良いんじゃないかい？」

と、スズメに割り込み、写真を選んだのはBIRDの隊長『羽根村トシユキ』。元自衛官で指揮能力もかなり優秀。14年前の『怪獣災害』の時は一等兵だった。ピジョンに乗り、指揮を執る。

「ああ、これですか？…うん、これはちょっと失敗しちゃってます、これはアウトですね。」

「そう？ちゃんと撮れてると思うけど。」

「オホン…隊長、会議中ですが。」

と、口をはさむのはタツミ。

「あ、ごめんごめん。」

ハハハハ、と照れくさく笑うトシユキ隊長。

「ハハ、トシユキさんったら。」

トシユキの行動に笑うのは『愛川スザク』。日本で五本の指に入ると言われる武術の名家『愛川家』の長男。空手、柔道、剣道ではBIRDの隊員達の中でトップである。以前の『怪獣災害』では、わずか十歳だったにもかかわらず勇敢に怪獣に立ち向かったのだという。その時に当時のトシユキ隊長と知り合っており、だから彼だけトシユキのことは『隊長』、もしくは『トシユキさん』と呼んでいる。

「タツミ隊員、続けて。」

トシユキ隊長がそう言うのとタツミは怪獣シネークについて講義を再開する。

「うおほん…え〜…」

と、その時だった…

ビィィィ！ ビィィィ！ ビィィィィ！

「え？…」

BIRDのメンバー全員がビックリする。いきなりサイレンが鳴り出した。

「ん？…何？」

「…緊急事態発生！緊急事態発生！…」

その警報を聞いた隊員達、そしてモニター画面に映像が出る。

「やあ、BIRDの隊員諸君、元気かな？」

映ったのは『山内カズマサ』、元自衛官のWDS参謀。十四年前の『怪獣災害』の時は怪獣と戦う自衛隊の隊長として指揮をとっていた。

「これは、山内参謀。全員、敬礼！」
トシユキの声で隊員一堂、敬礼をする。

「さて、先程の警報なのだが…」

別の映像が出る。

「太平洋上にいきなりと言っても良いだろう、一つの『島』が現れた。」

「『島』…ですか？」

「うむ…この奇っ怪な『島』はまだ調査されていない、太平洋とは

「いえども日本の海域だからBIRDの諸君に調査をお願いしたい。」

「わかりました、参謀。」

トシユキがそう言うともニターの映像は消えた。

「聞いての通りだ。」

隊長は隊員達に言う。

「BIRD、レディーゴー！」

「レンジャー！」

隊員達はかけ声と共にすぐさま出勤の準備をする。

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ！

ビッグロックの上半分が花が開くように開く。中から三機のジェット
トバードが出てくる。

ヒユウウウウウウウ！！

ジェットバードにエンジンが入り…

ドシユンッ！！ ドシユンッ！！ ドシユンッ！！

空を飛ぶ。

太平洋 日本海域 『島』

この『島』には深い森があり、真ん中には火山と湖がある。

ジェットボードは『島』の上空に到着し、『島』の中心に着陸する。

「『島』に到着、これより『島』の調査に入る。」

トシユキ隊長はそう言い、隊員達はいろんな機械を持って『島』に降り立つ。

「うーん…別に異常はないわね。」

タツミは基地から持ってきたセンサーを見ている。

「異常といえば、この森、すごくジメジメしてるね、まるでジャングルだ。」

トラオは肌を触りながらつぶやく。

「トラオ隊員！ボサツとしてないで分析！」

タツミ隊員は大声でタイガ隊員に怒鳴る。

「はいはい、わかったよ、働き者だね、君は…」

トラオはセンサーを手に持ち、分析を開始する。

こちらはゲンブとシズクとトシユキ…

「ふん！」

ゲンブは大きな岩を腕力でどける。

「あら、石版だわ。」

岩の下には古代文字が刻まれた石版があった。

「どれどれ…」

トシユキは石版を見る。

「……読めない…」

コケッ

ゲンブとシズクはこける。

「今解析しますから…」

シズクはハアツとため息をつきながらセンサーを石版に読み取らせる。

そして、こちらはスザクとスズメ…

パシヤッ パシヤッ

スズメは森の中を歩きながら自然の中を撮っている。

「写真撮るのはいいけど、足元には気をつけてね。」

ドケッ！

「きゃ！」

とスザクが言ってる最中にスズメは転ぶ。

「はぁ、言ってるそばから…大丈夫？」

スザクはスズメの手を取り、スズメを起こす。

「へへ、大丈夫だよ。」

スザクは内心ホツとする。

「もう少し奥に行ってみよう。何か発見があるかもしれない。」

「はい！」

スズメは陽気に答える。その後にスザクはセンサーを見る。

「ん、生体反応は無し…」

ピー！ピー！ピー！

「え！？生体反応確認！これは……」

スザクは恐る恐る答える。

「怪獣の生体反応！？」

「ええ！？」

スズメはおびえ、スザクはBIRD専用の特殊レーザーハンドガン

『BIRD・フェザーガン』をかまえ、警戒する。

「隊長！こちらスザク、応答してください！」

スザクは万能通信機『ウイング・プレイヤー』を取りだし、トシユキ隊長に連絡する。

「トシユキだ、スザク君、何かあったのかい？」

「今センサーに怪獣の生体反応がありました！この島には怪獣がいるんです！」

「なんだって！？よし、わかった！他のみんなをそちらに向かわせる！君らはそこからへたに動くんじゃないぞ！」

「了解！」

スザクは通信を切る。

「聞いた？スズメ隊員、へたに動かないでね……ん？」

スザクはスズメを見る。スズメは石か銅像になったかのように固まっている。

「どうしたの？」

「す……スザクさ……ささん……あ……ああ……あれ……あれ……」

スズメはとても震える声でしゃべる。

「え？」

スザクはスズメが指で指す『モノ』を見る。

「……わあ……」

スザクは呆然とする。

クオオオオオオン！

そこには『怪獣』がいた…

怪獣は亀のような姿をしていた。

「怪獣だ。」

スザクは冷静になっているが、スズメはそうではなかった。

「…あが…ああ…」

スズメはまだ震えており、何故かカメラマンとしての癖なのか、カメラを怪獣に向けて…

パシャッ！

と写真を撮る。

「え！？ちよ、スズメ！カメラはまずいって！」

「は！？」

スズメは無意識にカメラを撮ったようだ。気づいた時はすでに遅かった。

パシャッ！

スズメはすっかりシャッターを押して、フラッシュを放ってしまった。

クオオ？

亀怪獣はシャッター音でスザク達に気づく。

「うえ!?!」

「やばい…!」

スザクとスズメの顔は真つ青になり、冷や汗をかく。

クオオオオオオオオオ!

怪獣はスザク達に向かって走り出す。

うわああああああ!!

スザクとスズメは大声を上げて全速力で逃げる。

その頃、こちらはタツミとトラオ…

うひゃあああああ!!

こちらも全速力で逃げていた、『怪獣』から…

「何だよ! ありゃああああ!?!」

トラオとタツミを追いかけているのかどうかわからないが、追いかけている怪獣はとても大きな蝶の姿をした怪獣だ。

キュイイイイイイ!!

バリバリイイ!

蝶怪獣は羽から電気を発している。見た目だが、10万ボルトあるだろう。

「電気出すのかよおおおおお!!」

「しびれるうううう!!」

そして、こちらはゲンブ、シズク、トシユキ…

「みんな、ジツとするんだぞ、ジツと…」

「はい!」

「……でも…『あれ』…」

三人の目の前にいるのは魚とイグアナを合わせた容姿の怪獣だ。その怪獣を見てシズクは何かを言いたそうにしていた。

「あの怪獣…寝てるんじゃないやありません…」

シズクの言う通り、魚怪獣はグーグーと寝息をたてて眠っている。

「ありや、ホントだ。」

トシユキはホツとする。

スザクとスズメはまだ怪獣から逃げている。

「ハア…ハア…ハア…」

二人とも疲れきっている。

「も…もう…ダメ!………」

スズメは倒れかけるがスザクがスズメの腕を掴み、引っ張る。

「あきらめちゃダメだ!」

スザクの言葉にスズメは力をふりしぼる。

「はい!……あ!」

スズメは『何か』を見た。見えたのは、蝶怪獣から逃げているタツミとトラオであった。

「おお!スザク!」

「スズメちゃん!」

タツミとトラオもスザクとスズメに気づいたようだ。

「タツミさん！トラオさん！」

スズメが二人の名を呼ぶ。

「君らも大変なのに追われているな！」

スザク達は合流し、まだ逃げる。

四人は追われながら走っていると湖に出る。

「あ、湖に出た。」

湖はアクアクリスタルのようにきれいだ、スザク達はそんなのに見とれているヒマはないのだ、今は逃げなきゃいけない時。

「あ！あそこにいるのは隊長！」

タツミは隊長達を見つけ、トラオが叫ぶ。

「隊長！！！」

その叫びが届き、隊長達はスザク達、逃げている人々の方へと向く。

「げげ！あいつら！！」

シズクは真っ青になる。

「叫ぶなああああ！ここに居る怪獣が起きちゃうだろおおおお
！！！」

ゲンブが叫び返す。

「バカ！あんたまで大きな声を出したら！」

シズクが止めるが、遅かった。

ゴオ？…

ムクウ…

ゴガアアアアアアア！！

魚怪獣が目覚めます。

「いやああああ！！！」

「あちゃ〜!」

「目が…覚めちゃったようだね…」

魚怪獣は寝ぼけている眼でトシユキ達を見つめる。

ゴガアアアアアア!

魚怪獣はトシユキ達に近づく。

「あわわわわわわ…」

ゲンブは慌てた表情に対し、シズクとトシユキは冷静な表情だ。シズクは両手に二丁のフェザーガンをすばやく持つ。

「隊長!」

スザク達が合流だが、怪獣二匹も魚怪獣と合流だ。

「うわ〜…」

「大ピンチ…」

「絶体絶命…かな…」

BIRDの全メンバーが怪獣に囲まれてしまった。最悪の状況だった…

その時、

「え!?!」

隊員一同が驚いた。何故驚いたか、それは湖が光り輝いたからだ。

「こ…これは?」

「見ろ!怪獣達が!」

トラオの言葉により隊員一同は怪獣達を見る、すると彼らは何と…

「ハハハハ、くすぐつたいよ。」

クオオオオオオオン…

キュイイイイイイイ…

ゴガアアアアアア…

怪獣達はスザクにじゃれていた。

「何で!？」

スザクをのぞく隊員一同またもや驚く。

この事はビッグロックに居る山内参謀に報告された。

「怪獣達はスザクがいれば問題は無いだろう、私は怪獣達よりも湖から発させられた快光が気になる、そちらを最前線に調査をしてほしい。」

「わかりました、参謀。」

トシユキはそう言い、通信を切る。

「みんな、集まってくれ!」

トシユキが隊員達を呼ぶと、みんなは集まる。ただしスザクが行くと…

クオオオオ…

キュイイ…

ゴガアア…

後ろから怪獣達がついて来る。

「はい！君達はそこでおすわり！」

スザクが怪獣達にしつけをする。怪獣達は言われた通り、その場に座った。

「犬か！」

トラオがツッコむ。

「あゝ冗談はそこまでにして、さっそくだがこの湖の調査をする」となった、みんな、良いね？」

隊員達は全員敬礼をする。

「さて、今からこの中で一人を決めて、この湖に潜ってもらおう。」

「となると、誰かが『ペンギン』に乗るといふ事ですよね？」

『ペンギン』とはBIRD専用の小型潜水艦である。普段はピジヨンに備えられている。

「誰が行く？」

トシユキは隊員達に問う。

「では、ジャンケンで！」

みんなはジャンケンを始める。

「ジャンケンポン！」

スザクはグー、トラオもグー、ゲンブもグーでタツミもグー、しかしスズク副隊長はパーである。

「あ、勝った。」

「負けた……」

四人はズーンと落ちこむ、何故落ちこむ……

「よし！行け！」

「スズメちゃん、湖底の写真撮りたいから一緒に来てくれる？」

「はい、喜んで。」

スズクとスズメがペンギンに乗る。

スイイン シュオオオオ

二人を乗せたペンギンがエンジンを機動させ高性能ガラスのハッチを閉める。操縦はシズク、撮影はスズメだ。

ブクブクブクブクブクブク

ペンギンはどんどんと湖に沈んで行く。

「大丈夫かな？あの二人。」

「大丈夫じゃない？この湖には怪獣の反応ないから。」

湖の底

シュコオオオオオオオオオオ...

どんどんと湖に潜って行くペンギン、辺りは真っ暗闇だ、シズクはペンギンに装備されているライトをつけた。

「うわああああ...」

なんと湖の底には巨大な遺跡が眠っていた。スズメは感動して声を出す。湖底の中央には巨大な円形状の「とうろう灯籠」のような物があった。「すごい...昔ここに人間が住んでいたのかな？」

スズメはこの遺跡を撮影しながら地上にいるトシユキ隊長達に遺跡の映像を送った。

地上

トシユキ隊長達はペンギンから送られた映像を見る。

「これは…」

「すごい…」

彼らもすごいと言わせてしまうほど巨大で珍妙な形をした遺跡であった。

「ん？スズメちゃん、右の壁を映して。」

タツミに言われた通りスズメは右にある壁を映した。

「…これは…『壁画』…」

湖の底

「……『壁画』だね…」

ペンギンに乗る二人もその『壁画』を見た、その『壁画』はこの遺跡を造った古代人が描いたと思われる。

「…この絵…」

絵は『何か奇妙な獣と六角形の眼と赤色の体をした人』が古代人に祭られている様子を描いているようだ。その他にも『火の鳥』が先ほどの『赤い人』に変化していく様子や大きな獣が『赤い人』と戦っている様子を描かれている。

地上

「ん？…この獣は…」

スザクは壁画に描かれているその獣をよく見る、そして発言した。

「……『ゴメス』？」

BIRD本部

今ここでは監視衛星から送られた映像を見ていた。

「これは…」

「…『隕石』と思われませう。」

監視映像は地球に目掛けて落ちて来る巨大な『隕石』であった。

「落下位置は特定できるか!？」

山内参謀は部下に問いかける。部下はすぐにパソコンを搜索し調べた。

「大変だ!場所は…」

部下は落下位置を答える。

「例の『島』です!」

すなわちスザク達が調査に行った場所だ。

『島』

トシユキ隊長達はまだ湖底の遺跡の調査中であった。

「たくさん壁画があるなあ…」

「コピーできてる?」

「できてるよ。」

ピー!ピー!ピー!

トシユキの『ウィング・プレイヤー』が鳴っている。

「トシユキだ!」

「私だ!山内だ!」

「参謀!どうしたのですか!?!」

シズクはなんとかペンギンを浮上させようとする、しかし…

ガンー!!

ペンギンに湖底での落石が起き、大きな岩がぶつかりペンギンは体制を崩してしまう。

「きゃあああああああああ!!」

ペンギンは逆に沈んでいき、しかも大量の岩の下敷きになってしまった。

「おい!二人とも!!聞こえないのか!おい!」

トラオが何度呼びかけても二人は気絶してしまい返事ができない。

『島』 地上

「シズクさん!スズメちゃん!」

「湖底で何かあったのでしょうか!?!」

「わからない!だがヤバいぞ!この状況は!」

「隊長!『隕石』を肉眼で確認!」

空を見上げると赤く光る雲が、その雲の向こうにだんだんと落ちて来る『隕石』があるのだ。

「隊長!もう限界です!」

「二人には悪いが…」

「我々だけでも逃げましょう!」

隊長は考え込む。

「トシユキさん！僕が二人を助けに行きます！」

スザクが湖に飛びこんだ。

「スザク君！」

もうスザクは潜って行ってしまった。

「スザク君…すまない！…！」

トシユキ達は泣く泣く湖を後にした。

湖の底

気絶したシズクとスズメ、ペンギンは機動しない。彼は絶体絶命なのだろうか。

ブクブクブクウウ……

ペンギンに向かって潜って行くスザク。

早くしなきゃ… 『隕石』が来る…

スザクはペンギンにたどり着く。

くそ！開かない！…

どうやらドアが落石で壊れてしまったようだ。

ボウウウウウウウ…

突如中央にあつた灯籠に炎が灯つた、水の中だというのに。

な…何で…炎が!?!?…

スザクは驚いた。

《君は選ばれた…》

誰!?!?…

《どんな状況におかれても仲間を助けようと思つ心…私はその行動に感動した…》

あの炎から声が…

《私は遠い昔に滅んだ『光の戦士』…君と融合する事で君は『私』になれる…》

え?どういふこと!?!?…

《もう時間がない…行くぞ!…》

え?え?え!?!?…

ポオオオオオオオオオオオオオオオオ!

炎は一気に燃え上がるとだんだんと形削っていく、その姿は。

『火の鳥』…

ブワアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！

『火の鳥』はスザクに激突した。

地上

トシユキ隊長らはジェットバードで『島』から脱出していた。ただ『島』から飛び出たのはイーグルとピジョンだけ。

「スザク君…」

「もう…間に合わない…」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ！

隕石が『島』に後2分ほどで激突する。

「スザク君達のためにファルコンを置いておいたが、もうダメか…」
トシユキはイーグルにも伝達する。

「これより我々だけでも離脱する！」

〔了解！〕

トシユキの命令でイーグルとピジョンは『島』から遠くに離れた。

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ！

隕石が『島』にぶつかる。

ドカアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！

隕石が『島』に大激突し『島』は粉々に吹き飛んでしまった。これではスザク、シズク、スズメの三人は無事ではないであろう。

「スズメちゃん……」

「副隊長……」

「スザク君……」

みんなはがっかりする。

キュイヤアアアアアアア！

突如鳴き声があった、隕石が落ちた場所、吹き飛んだ『島』からだ。

「何だ！？今の鳴き声！」

「センサーに反応！怪獣です！」

タツミが発言したその直後である、壊れた『島』から上がる煙からボフツと巨大な影が飛び出した。

キュイヤアアアアアアアアアア！！

怪獣だ。トカゲのような図体でクチバシがあり、三つの眼を持ち、コウモリの翼に少し似た翼を四つもある怪獣だ。

【隕石怪獣メテオルガ】

「うわ！？何だ、あの気色悪いのは！？」

トラオはギョツと驚く。

「恐らく、先ほどの隕石から現れたものではないかと……」
タツミは分析をした。

「宇宙線の反応もありますので間違いありません。」

キイヤアアアアアアアアア！！

怪獣メテオルガは日本に向かって飛んでいく。

「日本に向かっていている！」

「迎撃する！行くぞ！」

トシユキは隊長として判断を下した、怪獣退治となった。イーグルとピジョンはすぐにメテオルガを追いかけた。

キユオオオオオオオ!!

だがメテオルガが速すぎてジェットボードでは追いつく事ができない。

「ダメだ!」

「追いつけない!」

もうじきでメテオルガは東京湾に到達する、このままではメテオルガは東京で大暴れする。

ピーピーピーピー!

ピジョンのセンサーが後方からやって来る物体をキャッチした。

「何!?!」

ヒユオオオオオオオン!!

その物体は一瞬にしてピジョンとイーグルの間を通り過ぎた。その時隊員達はその物体を一瞬だけ肉眼で確認する事ができた。

「『火の鳥』…」

ヒユオオオオオオオ!!

『火の鳥』はあっという間にメテオルガの前に立ちはだかった。

キュイヤアアアアアア！

『火の鳥』はメテオルガの前に立ちはだかると同時にみるみる内に姿形を変えていった。

「何だ、形が変わっていく!?!」

まるで幻影のように『火の鳥』が変化していく。

シュワア！！

『火の鳥』は全身が赤い体で六角形の眼、肩や胸に鎧のようなプロテクターが装着されていて、更に頭には赤いブーメラン状の物が装備されている『巨人』へと変身した。

「何だ、あれは!?!」

「あれ！湖底にあった壁画に描かれていた!」

隊員達がビツクリする中、『巨人』と怪獣メテオルガの戦いが始まった。

ディアツ！！

『巨人』はメテオルガの顔を殴る、メテオルガも負けずと手の爪で

『巨人』をひっかこうとした。

デアッ！

『巨人』はその手を瞬時良く受け止めた。

シュワッ！！

『巨人』の連続パンチがメテオルガの腹に当たる。

キイヤアアアアア！！

メテオルガはクチバシが光り、クチバシから光線が発射された。『巨人』に当たるかと思いきや『巨人』は瞬間移動した。□

デイツ！

『巨人』はメテオルガの背後に現れた。

キイヤ！？

メテオルガは背後に気づいたが手遅れだ。

シュアッ!!

『巨人』はメテオルガのシッポをつかんだ。

ブン！ ブン！ ブン！

『巨人』はすごい勢いでメテオルガを振り回した、ジャイアントスイングだ。

「うはああああ！」

「す…すごい…」

ブン!!

『巨人』はメテオルガを投げ飛ばした。

キイヤアアアア!!

だがメテオルガは空中で翼を広げ立ち止まった。

キイヤアアアアアアアアアア!!

メテオルガは怒り、『巨人』に向かって飛んで行く。

シャキン！

『巨人』は頭のブーメランに右手をそえる、すると一瞬光った。

ディアアア！！

『巨人』の手がいつきに振り下ろされるとブーメランがメテオルガ目掛けて飛んで行った。

スパ！ スパ！ スパ！ スパ！

一瞬の事だった、『巨人』が投げたブーメランが目にも留まらぬ速さでメテオルガの翼を四つとも切ってしまった。

「ええ！？」

「翼を切っちゃった！」

キイヤアアアアアアアアアアアアアアアア！！

メテオルガは翼を切り取られた。メテオルガは翼を失い海へと落ちる。

シュワア！！

『巨人』はメテオルガよりも先に海上ギリギリまで向かった。

シュワ！！

『巨人』は両腕を胸前でX字にクロスしてから、その腕をいっきに広げた、その時腕にそって炎が噴きあふれ腕へと吸収された、まるで鳥が翼を広げるように。

ディアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！

『巨人』は広げた腕を瞬時に十字型のクロスに組んだ、すると腕から赤い炎のような光線が放たれた。

ポアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！

その光線はメテオルガに直撃する。

キイヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！

スズメの声もした。

「スズメちゃんも！」

「無事だったのか！」

後方を見るとジェットバードのファルコンが飛んで来た。

「スザク君は!？」

隊長が問いかけた。

「私達気づいたらファルコンに乗っております……」

「スザク君は見えていないんです……」

「そうか」

トシユキはがっかりした。

「隊長！」

トラオが通信に割りこんで来た。

「何だ？」

「下をご覧ください！」

トシユキが下、すなわち海を見ると。

「オーイ！」

海にプカプカと浮いて手を振って大声を上げてジェットバードに呼びかけている人物がいる。

「スザク君!？」

「あれ!?!何でここで浮かんでるの!?!」

ビジョンは急いでスザクを回収した。

東京湾 浜辺

ジェットバードはこの浜に降り立ちスザク達から事情を聞いていた。

「いや、助かりました。」

「何であんな所に？」

「それよりよく助かったわね、隕石が落ちてきたのに……」

タツミの質問にシズクとスズメは。

「それが、私達にもさっぱり……」

「気がついたら、ファルコンに乗って『島』から脱出していた……
自分達にもわからないようだ。」

「スザクは？」

トラオは問いかける。

「僕とスズメちゃんと副隊長を助けてくれたのは、あの『巨人』だよ。」

と答えた。

「え？さっき怪獣を倒した『巨人』が？」

「うん、あの『巨人』は『島』の湖底にある遺跡で長い眠りから目覚めて地球の平和を守るために今後僕らの味方になってくれます。」

スザクはハツキリと答えた。

「ああ、あの壁画に描かれてた人！」

スズメは壁画の事を思い出した。

「で、何でスザク君だけ海に？」

ゲンブが問いかける。

「え」と、ファルコンに二人を乗せたのはいいけど、実際一人乗りのファルコンだから僕は窮屈で乗れなかったので僕はファルコンにしがみついて『巨人』がファルコンを運んでくれたんだけど、僕はうっかりファルコンから落っこちちゃって……」

スザクは恥ずかしながら話した。

「それは災難で……」

「ところでさ、あの『巨人』の名前は？
タツミが問いかける。

「名前無いよ、あの人には。」

「え？無いの？」

「困るわ、名前が無いんじゃ何て呼べばいいのかしら？」

「うーん、じゃあ『ウルトラマン』てのはどうかな？」

スザクが『巨人』に名前をつけた。

「いいねえ、それ！」

「いや、それはどちらかというと種名になるわ。」

そう、生物には種類がある、『人』、『犬』、『猫』、『魚』、『鳥』、『虫』。『ウルトラマン』はあの『巨人』の生物学上の名前になる。

「じゃあ種名は『ウルトラマン』、それで彼の名前は。」
スザクは続いて名前をつける。

「『火の鳥』……といえば『鳳凰』……そうだ！名前は『ホウオウ』にしよう！」

「『ホウオウ』か、火の鳥にはぴったりな名前だ！」

「決まり！あの巨人の名前は！」

みんなも賛成。巨人の名前は。

『ウルトラマンホウオウ』

第1話『火の鳥』（後書き）

怪獣データファイル

【隕石怪獣メテオルガ】

『島』に落ちた隕石から出現した宇宙怪獣。鋭い爪とクチバシから発射される光線弾が武器。マツハ5のスピードで空を飛ぶ。名前の由来は『^{メテオ}meteor』から。

第2話『恐るべき敵』

夜11時58分

青空市 マンション 202号室

この部屋には36歳の女性と14歳の娘の親子が住んでいる。今母親である女性『灰田利子^{はじたとしこ}』が一人テーブルで泣いている。

「くやしい……何で私が会社をクビにされなきゃならないのよ!」
「どうやらやけ酒のようだ。」

「全部!全部あの上司がイケないのに!」
「会社で仕事にミスがあった、よって彼女が責任を負い会社を辞めさせられた。」

「アイツが悪いのに!アイツが悪いのに!」
更に泣きじゃくる利子。時刻は午前0時となった。

【その人…憎いですか…】

「え!?!」

突如どこからか、この部屋には利子しかいないのに、誰かの声があった。

「誰!?!」

娘の声ではない、今のは明らかに男の声だ。

【はじめまして、利子さん…】

その者は闇の中からスウと姿を現した。

「あ…あなたは…誰？…」

利子は怯え震えた声で問いかける。

【怪しい者ではございません、あなたの願いを叶えに来た者です…】

「え？」

闇から現れた者は細い身体の男性で頭にシルクハットをかぶってタキシードを着ている、顔は『B』と描かれた仮面で隠されている。

【申し遅れました、私の名前は『ブラックジャック』と申します…
以後お見知りおきを…】

ブラックジャックと名乗る男は紳士のようにあいさつをした。

「ブラックジャック？」

【これをどうぞ…】

「これは？」

ブラックジャックが出したのは4枚のカード、それぞれ違うマークが描かれている、一つは『スペード』、一つは『ハート』、一つは

『クローバー』、一つは『ダイヤ』である。そのカードを利子にわたした。

【このカードに願い事を唱えれば、その願い事が叶います…】

「そ…そんな詐欺なんかにはならないわよ!…」
利子は警戒する。

【では、お試しに『クローバー』のカードに願い事である『上司が死に、会社のクビも取り消し』を唱えてみてください…】

ブラックジャックの言葉に半信半疑である利子だが、騙されたと思って試しに『クローバー』のカードに願い事を言った。

「上司が死んで、私が会社に復帰できますように…」

利子が唱えた、すると。

ポウッ!!

『クローバー』のカードが緑色の炎となっていていつきに燃えてしまった。

「きゃ!?!」

利子はビツクリした。

「…で、これからどうなるの!?!?……」

【明日の朝刊を見ればわかりますよ、あなたの願いが叶っていますから…】

スウウウウ…

ブラックジャックは再び闇の中へと消えていった。

「本当かしら…」

利子はまだ半信半疑であった。

上司の家

「ぐわあああああああああ!?!」

この家から悲鳴が鳴り響いた、何が起こったのだろうか。

青空市 愛川道場

BIRDの隊員『愛川スザク』は今日は休日なので我が家である道場に帰って来ていた。

「はい、そこで相手の動きを読む。」
スザクはこの道場の師範である父『愛川ツバメ』とともに道場の生徒達に指導をしている。

「お兄ちゃん！」

道場の稽古中にスザクに声をかけて来たのはスザクの妹『愛川サクラ』。

「コラ！サクラ、今道場の稽古中だよ！」

サクラをしかるスザク。

「お兄ちゃん、休日に帰って来たと思ったたら道場に付きつきりだもん、たまにはサクラの宿題見てよ〜」
兄におねだりするサクラ。

「は〜：妹を持つ兄は大変だよ〜わかった、見てあげるよ。」
スザクは了解する。

「父さん、ちよつと外れます。」

「ん、わかったよ。」

父ツバメが生徒の指導を引き受ける。

「おーい！スザク！」

大声でスザクを呼ぶのは。

「あれ？トラオ？」

スザクが外を見ると大当り、木月トラオ隊員がいた。

「どうしたの？」

「すまないが、休暇は無しだ！緊急召集ですぐに、この先の『三栗^{みくり}』
つて人の家に行くぞ！」

「『三栗』？あ、そこって確か…」

スザクが何か言おうとしたが。

「つべこべ言わず早く行くぞ！」

トラオは急がせる。

「わかった！」

スザクは急いでBIRDの服に着替える。

「え、お兄ちゃん、お仕事に行くの〜！」

サクラは残念がる。

「ゴメンね、サクラ。それと宿題は自分でやりなさい！」

「ハイハイ……」

スザクはすぐさま家を出て待機していたトラオといっしょに駐車してたBIRD専用自動車『ドードー』に乗り召集場所に向かった。

「行っちゃった……」

サクラは兄が仕事に行った事にズーンと落ちこむ。

「早く宿題やっちゃいなさい。」

ツバメもスザクのようにしかる。

「はい。」

サクラは自室に向かう。

ピンポーン

家の呼び鈴が鳴る。

「はい！」

家のドアを開けたのはスザクとサクラの母『モモ』である。

ガチャッ！

「こんにちは、おばさん、サクラちゃんいますか？」

尋ねて来たのはサクラの学校の友人『灰田ツツジ』。

「ツツジちゃん！いらっしやい！」

サクラが明るく出迎える。

「サクラちゃん、いつしよに宿題やるっ…」

が、ツツジは何やらサクラとは正反対の暗い感じをしていた。サクラはすぐにツツジを自室に案内した。

「ツツジちゃん、何かあったの？」

「え！？」

「暗い感じがしてたから気になっちゃって。どう？」

ツツジはコクツと頷く。

「最近、お母さんの様子がおかしいの…」

ツツジは訳を話す。

「三日前、この先の三栗って人が自宅で死んだって事件が起こったよね、その人、お母さんが働いてる会社の上司なんだよ。その人が死んだって朝刊を見た時、お母さん、ものすごくうれしうな顔をしてた…もしかしたらお母さんが三栗さんを殺したのかもしれないと思って…それだけじゃない、最近じゃあ宝くじが当たったとか大金持ちになったり、新しい恋人ができたりと、何か気味が悪いくらい良い事だらけなの…」

話を終えたツツジ、サクラはふと思いついた。

「三栗と言えば、お兄ちゃん、さっき三栗って人の家に行ったなあ…」

『三栗』さん家

BIRDの全メンバーがこの一軒家に集まっていた。ここでは三日前、ここに住む三栗金成氏かねなりが自殺をした、自室の机に『会社でのミスを部下の灰田利子になすりつけた』と書かれた遺書が発見された

ので自殺として間違いないと警察は判断したが、BIRDが不可解なエネルギー反応をリーダーでキャッチしており三日間の考えの末、調査に出動した。

「この探波装置たんぱを使えば、どんなエネルギーの波動もキャッチする事ができます。」

タツミはみんなに装置の説明をする。

「では、行動開始!」

トシユキ隊長の言葉により調査開始をした。

ピーピーピー　　ピーピーピー

「ダメですね、中々見つからない…」

「あのリーダー壊れてんじゃないか?…」

スザクもトラオも疲れた。ゲンブ隊員はマイペースに調査していた。「もしかしたら、この探波装置が壊れてるのかも。」

と失礼な事を言うゲンブ。

「失礼ね!私が見つけた探波装置に支障は無いわ!」

怒るタツミ隊員。

「タツミが見つけたんだ…」

BIRDのみんなは知らなかった。

「ん?スズメちゃんは?」

「スズメちゃんなら雑誌の記事を書くため三栗氏の家族を取材中だよ。」

タツミの質問にトラオが答える。

取材中のスズメ

「では、みなさんは旅行に行っていたため三栗金成氏が何故自殺したのか、いつ自殺したのかわからないのですね。」

三栗氏の家族は妻と娘が一人。

「はい…でも、主人が自殺するなんて、考えられません…」

「そのための調査なので、もうしばらく待ってください。」

スズメはなぐさめる。

調査中のスザク達

探波装置で何度も家の中を捜査するが何も見つからなかった。

「お兄ちゃん！」

兄を呼ぶ妹の声、この声はもしや。

「サクラ!?!」

スザクの妹サクラだ。

「何でここに!?!」

「お兄ちゃんやBIRDのみなさんに聞いてほしい事があって!」

「え?...トシユキさん、ちょっと!」

BIRD全メンバーにサクラはツツジの話を書かせた。

「ふむ、例のエネルギー反応とツツジちゃんのお母さんとは何か関係がありそうだな。」

トシユキはそう判断する。

「ん?」

スザクは自分が持つ探波装置を見る。

ピピピピピピピピピピ!

反応が出た。

「トシユキさん!」

「どこからだ!?!」

反応は微弱だがリビングの壁から来ている。

「ここから!？」

「確かに反応が!」

ピピピピピーピーピー……

徐々に反応が無くなった。

「あら?……」

「反応が消えた……」

「エネルギーが切れたのかしら。」

タツミは何故消えたのか考えるが。

「ともかく、ツツジちゃんのお母さんを調べる必要があるな!」

「まずは例のエネルギー反応が発生していないかを調べましょう!」

BIRDはすぐに基地『ビッグロック』に引き返した。

次の日

青空市立中学校

サクラやツツジが通っている中学校である。サクラとツツジはツツジのお母さん、利子の事で頭はいっぱいだったが何とか宿題を終わらせた。

「ハア〜一晩かけて宿題終わらせたから疲れた〜」

サクラは机にボタンと倒れた。

「ちよつとしつかりしなさいよ、みつともない。」

注意したのはサクラと同じクラスの生徒会長『相田椿』あいだつばき。

「だってえ、あれ?ツツジちゃんは?」

「え？あれ？どこ行ったのかしら？」
「サクラと椿はツツジを探しに行く。」

その頃、ツツジは…

ゲシッ！

バシッ！

「ああ！」

ツツジはある女生徒にいじめられていた。相手は『三栗雪子』、四日前に死んだ三栗金成氏の娘である。

「あなたの母さんが、アタシの父さんを殺したんだろ…」

「…知らない…」

「しらばつくれるな！あんな遺書残して自殺するヤツじゃねえんだ、うちの父さんは！あなたの母さんが殺したに決まってんだろ！」

「……だから知らないってば！」

「まだ言うか！」

雪子は持っている竹刀でツツジを叩こうとする、その時。

バキッ！

竹刀が弾き飛ばされた。

「大丈夫！ツツジ！」

竹刀を弾き飛ばしたのはサクラだ、ツツジの元に駆け寄ったのは椿だ。

「変な言い掛かりはやめて！何の証拠があるの！」

サクラの言葉に雪子はひるみ、その場を立ち去った。

「大丈夫？ ツツジちゃん、保健室に行こう。」

サクラと椿はケガをしたツツジを保健室に連れて行った。

ツツジの家

「ツツジ！ どうしたの！？ そのケガ！？」

利子は我が娘がひどいケガをしていたのに驚いた。

「学校で三栗って人にいじめられて……」

「三栗！？ まさか四日前に亡くなった三栗さん家の！？」

「お母さん、お母さんは人殺しなんかしてないよね！？ そんな事する人じゃないよね！？」

ツツジは泣きそうな顔で母を問い詰める。

「……お母さんがそんな事するはず無いじゃない、考えすぎよ。」
利子はツツジをギュッと抱きしめる。

BIRD基地『ビッグロック』

今、灰田家近辺でエネルギー反応が出ていないかのチェックをしている。

「四日前から灰田家に例のエネルギー反応が3回も発生している事が判明した、もしかしたらもう一度発生するかもしれない！ 十分警戒してくれ。」

「了解！」

「現場にはスザク君とスズメちゃんがいる、決定的な証拠が見つかるればいいのだが……」

ビービービービー！

レーダーに反応が。

「キャッチした！」

「灰田家からです！」

「やはり出たか！スザク君にも連絡！我々もジェットボードで向かうぞ！B I R D、レディーゴー！」

「レンジャー！」

灰田家

「待っていたわ、ブラックジャック……」

利子は娘を娘の部屋に入れた後、自室でブラックジャックと会っていた。

【最後のカード『スペード』を使うのですね？……】

「ええ、そつよ……」

【カードの意味は教えましたよね、『クローバー』は『幸』、『ダイヤ』は『金』、『ハート』は『愛』、『スペード』は『死』……】

「わかってるわ、だから『死』のカード『スペード』で殺してほしい人がいるのよ！」

【ほう、それは怖い事をおっしゃられる、それで殺してほしい人物とはどなたでございましょうか？…】

「以前『クローバー』で死んだ三栗の娘よ！あいつが私の大切なツジをいじめたのよ！」

【それは大変ですね…では、早速カードを…】

利子はポケットから『スペード』のカードを取り出した。

「三栗の娘を殺して…三栗の娘を殺して…三栗の娘を殺して…」

ポウッ！！

『スペード』のカードも一瞬にして燃えた。

【では、三栗の娘を殺しに向かいます…】

ブラックジャックはすぐに向かう、しかし。

「その前にコチラで事情聴取を願います！え」と『B』さん！

ブラックジャックが消える前にスザクとスズメが現れた。

「あなた達は！？」

利子は驚いた。

パシヤツ！

「決定的瞬間撮影しました！」

スズメがカメラで写真を撮る。

「奥さん！そいつはもしかしたら恐るべき力を持つ宇宙人かもしれない！さあ離れて！」

スザクは利子を遠ざけようとする。

【やれやれ、困りましたねえ…まさかBIRDの皆様がやって来るとは…】

ブラックジャックは頭を抱えてやれやれと頭をふる。

【さて、これでは仕事がしにくいので…】

ブラックジャックは利子の前に立つ。

「な…何？…」

ブラックジャックはスツと手を上げる。

【申し訳ございません…】

ズボオオオオオオオオ!!

「な!?!」

「うそ!?!」

スザクとスズメはおどろいた。ブラックジャックはなんと利子の胸元に手を突っこんだのだ。

ズボッ!!

ブラックジャックは手を利子から引っこ抜くと、その手には『キラキラと光る玉』が捕まっていた。

「何だ!?!あれは!?!」

【これは、あなた方人間が言う『心』でございます…『我々』はあなた方人間が言う宇宙人とは違う行い方、この『心』を支配する事で、この世界を侵略するのでございます…】

「『心』…『我々』…」

「おまえ達は何者だ!?!」

スザクはフェザーガンをブラックジャックに向ける。

【私は、別の世界『魔界』まかいから参りました『魔界人』まかいじんブラックジャック

ク』でございます…】

自己紹介を終えたブラックジャックは部屋の窓から『心』を投げ飛ばした。

ピカアア！ ピカアア！

『心』が落ちた場所から強い光が放たれた、その次。

ウワウウワウウワウウワウウ！

大きな口を持ち、右目がハート、左目がスペード、頭にクローバーがあり、両方の耳にピアスのようにダイヤが着けられており、ツボのような形の図体をした怪獣が突如現れた。

「怪獣!？」

【あれは、あなた方人間が言う怪獣、かもしれませんが我々『魔界人』が作り出したものなので区別できるように『ましゅう魔獣』とお呼びください…】

【A 魔獣バカラ】

【さあ街を破壊しなさい！魔獣バカラ！…】

ブラックジャックはそう言い残し闇の中へと消えて行った。

「あ、逃げられた…」

ウワウウウウウウウウウウウウウ！

魔獣バカラはブラックジャックに命令された通り、青空市を破壊し始めた。

パユン！　　パユン！

バカラは右目のハートからハート型の光線弾、左目のスペードからスペード型の光線弾を発射した。

ドカン！　　ドカン！

直撃した建設物は爆破された。だがバカラはこの攻撃しかない、この技しかないのだろうか。

「大変だ！スズメちゃん、早く青空市の市民を避難させて！」

スザクは指示した。

「はい！あれ？スザクさんは！？」

スザクはフェザーガンのエネルギーをチェックする。

「僕は魔獣アイツの進行をくい止める！」

スザクはすぐさまマンションから出て魔獣バカラに立ち向かう。

「スザクさん！」

青空市内

「うわあああああああ！！！」

「きゃあああああああ！！！」

逃げ惑う人々の中をくぐり抜けてスザクは魔獣バカラに立ち向かって行く。

ここならイケるかな？…

スザクはすぐにビルを駆け登り屋上に立つ。

スオン！

スザクの右手首に『火の鳥が描かれ赤い水晶が着いた金色の腕輪』が本当の意味で現れた。

みんなを、この青空市のみんなを守るため…

力を貸してくれ、『ホウオウ』！…

『腕輪』の名称は『ファイヤーリング』。

バツ！

スザクは右手を引っ込め、いっきに正面斜め上に拳を伸ばす。

「ホウオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！」

キヤアアアアアアアア！！

スザクが火の鳥となり巨人となる、ウルトラマンホウオウへと変身する。

シュワアアアアアア！！

ズズウウウウウウ！！

ホウオウは魔獣バカラの前に降り立つ。

ウウウウウウウウウウ！！

バカラは目の前に現れた巨人を敵と見なした。

パユン！　　パユン！

街を破壊した攻撃でホウオウを攻撃するバカラ。

ディアッ！

ホウオウはその攻撃を素手で弾き飛ばした。

シュワッ！

ホウオウはすばやい動きでバカラの周囲に立ち、バカラの頭を連続パンチでこらしめた。

シュココオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！

バカラは口から紫色の煙を吐き出した。

デュアッ！？

ただの目くらましだ、と思いきや。

ガブッ！

バカラはその隙にホウオウの腕に噛みついた、大きな口から行われた噛みつく攻撃、肉を食いちぎられるかもしれない。と思ったら。

シュワッ！！

ホウオウは噛み付いたバカラをそのまま持ち上げ投げ飛ばした。ものすごい怪力だ。

ウワウウワウウワウウウ！

バカラは痛がる。すぐに立ち上がり反撃しようとするが。

シュワッ!!

ホウオウは腕を翼のように広げ翼の形をした炎を腕に吸収する。

ディアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!

十字に組んだ腕から光線が放たれる、前回メテオルガ戦で使った技だ。名称は『ホウオウム光線』。

ウワウウウウウウウウウウウウウウウウウ!!

バカラに見事命中した光線、バカラは苦しみ。

ドカアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!

バカラは大破した。

ディア…

ホウオウは人差し指を大破したバカラに向ける、すると一線のオレンジ色の光線が放たれた。

シュパアアアアアン…

何かが元に戻るような音がした。

デュウウウウウウ！！

ホウオウは力をためているようだ。

ディアッ！！

両手をまっすぐ空に上げると、炎が打ち上げられた。

パアアアアアアアア…

炎は火の粉となり街に降り注いだ。

「何だ、これは！？」

「近寄るな、火傷するぞ！」

人々は恐れるが、人々が考えている事とは真逆な事が起きた。

フワアアアアアアア...

なんと、火の粉が落ちた場所、壊れた街が再生されていくではないか。その上ケガをした人々もその傷が癒されていく。

「何だ！？傷が治っていくぞ！」

「すごいぞ！これは！」

「ウルトラマンホウオウは神様か！？」

人々はおどろいた。

シュワッ！！

ウルトラマンホウオウは飛び去った。

キイイイイイイイイ！

少し遅れてジェットボードがやって来た。

「あれ？もう終わり？」

「私達、遅刻みたいね...」

BIRDのみんなはガックシと落ちこんだ。

トシユキらメンバーはスザクとスズメと合流する。そしてスザク達から『魔界人』の事を聞いた。

「そんな非科学的な…」

「事実を僕らは見た…」

「『魔界人』かあ…何か厄介な敵が現れたもんだ…」

「あ、そういえば『利用されてた』ツツジちゃんのお母さんは？」
トラオが問いかけると。

「どうしてなのか僕にもわからないけど、魔獣にされたツツジちゃんのお母さんはウルトラマンホウオウが元の姿に戻してくれた。」
とスザクが答えた。

「そうか、よかった。」

胸をなで下ろすトシユキ。

「けれど『魔界人』に関しては用心した方がいいですね…」

「そうだな…」

BIRDは新たなる宿敵『魔界人』に対し緊張が走る。

第2話『恐るべき敵』（後書き）

魔獣データファイル

【A 魔獣バカラ】

利子の『心』を支配した『魔界人ブラックジャック』が利子の『心』を利用して生み出した魔獣。両目から飛び出る光線弾が武器。
名前の由来は『バカラ』というトランプを使ったカジノゲームから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0776t/>

ウルトラマンハウオウ

2011年10月9日23時25分発行